

今年もあっという間に暮れようとしています。今年度は6月に石巻市門脇地区で花壇活動を実施しました。8月には高校生を連れて南三陸町のボランティアNPO法人OGAの依頼で野菜づくりの農業支援活動を行いました。OGA代表の米人アンジェラさんは先日、ケネディ駐日大使が南三陸町被災地を訪問した時に案内役をしていました。

11月には被災地支援としてJA那須南と共同してJAまつりにおいて石巻市泊浜の活ホタテの直送販売を実施しました。同月に那須烏山市内の小中高生を連れて栃木の新米と応援メッセージを届けるまごころ子ども親善大使活動も実施しました。この時には6月に作った門脇地区の花壇に寄り、チューリップ球根など来春用の花壇作りも行いました。

これらの活動について11月以降の新聞等の記事を紹介します。また、子どもたちの感想文も併せて本号で紹介します。

11月2日～3日のJAまつりで活ホタテの直販実施

昨年は石巻市荻浜の生牡蠣の直販を行いました。今年は復興にはほど遠い状態で苦戦しながらもホタテ養殖に取り組んでいる同市泊浜の支援を第一に考えJAと調整しながら計画しました。

11月16日まごころ子ども親善大使及び門脇花壇活動

那須烏山市内の小中高生を連れて栃木の新米と応援メッセージを届けるまごころ子ども親善大使活動と門脇において来春用の花壇活動を行いました。

平成25年11月18日読売新聞



石巻仮設に新米と
応援のメッセージ
那須烏山の団体
那須烏山市の小中高生や
JAなす南の役員ら約40人
が16日、宮城県石巻市の仮
設住宅などを訪ね、応援メ
ッセージや新米計360キ
ロを手渡した。那須烏山市の
ボランティア団体「チーム
龍JIN」が企画。参加者
は東日本大震災の被災者と
の絆を深め合った。

訪問したのは、牡鹿半島の漁港の荻浜や鮎川小仮設の住宅と、門脇地区。高年生の司会で交流会を開き、避難者や漁師らと「ふるさと」を歌ったり、参加した小中高生23人で結成した「まごころ親善大使」が作文を読んだりした。新米は山田清JA組合長らが手渡した。

門脇地区では、今年3月から龍JINらが手入れしている花壇で、来春に向けてチューリップ、スイセンの球根やパンジーの苗などを植えた。球根や苗は、那須烏山市民らが提供した。

龍JINの小堀道和代表は「少しずつ風化しつつある大震災をいつまでも忘れず、これからも応援の輪を広げたい」と話した。

平成25年10月31日読売新聞

東北の復興応援
JAまつり開催
那珂川で2、3日
JAなす南は2、3日、
那珂川町白久の本店でJA
まつりを開く。宮城県石巻
市から直送される新鮮なホ
タテを販売し、復興に向け
今も奮闘している東北の被災地を支援する。

山市の災害ボランティア団体「チーム龍JIN」との共催。龍JINが支援している石巻市の牡鹿半島・泊浜では、大きな被害を受けたホタテ養殖がやっと軌道に乗り、今年から出荷できるようになった。

昨年のまつりでは、牡鹿半島の漁師グループが養殖した生ガキが販売され、人氣を呼んだ。新米を贈るな

ど交流は今も続く。ホタテは両日とも、当日午前中に生きたままで宅配便で届く予定。自慢のホタテを2枚500円で販売する。

当日は、JAなす南のゆるキャラ発表会、大型梨に「こり」の皮むき大会、とちぎ和牛の試食・販売なども行う。問い合わせは、JAなす南総合企画課（0287・96・6150）へ。

子どもたちの作文紹介①

まごころ子ども親善大使活動と来春用の花壇活動に参加する思い及び参加後の感想文を多くの子どもたちが書いてくれました。一部を紹介します。

参加する思いをつづって鮎川小仮設集会所で読んでくれた作文です。

「ボランティアに参加して」

鳥山クラブ（鳥小6年）羽石侑輝

ぼくはこの間、龍 JIN の小堀キャプテンから「石巻に行かないかい」と聞かれた時、また石巻に行けるのかと思うとうれしくて、すぐに返事をしました。



石巻のみなさんは、毎回ぼく達を温かくむかえてくれるので、ぼくは石巻に行くのが楽しみです。石巻のみなさんの役に立ちたいと思ってボランティアに参加しているのですが、いつもぼくの方がみなさんの笑顔に元気をもらっているような気がします。

ぼくが前回、野球チームの仲間と参加したのは6月の花だん作りでした。自分達で育てた苗を植えるだけかと思っていたら、花だん作りから始まり、その花だんを作る場所の土がとてもかたいのにおどろきました。ぼく達子どもでは歯がたちませんでしたが大人的の中にはドリルを使って作業をする人もいてとても助かりました。その土の中には思い出のつまった品物やおもちゃもありました。それを見て津波が家や人の命、大切なものをうばってしまうんだなあと思いました。

こんなにかたい土で、花だんが完成するのか不安になりました。花だん作りは思っていたより大変でしたが、みんなで作った花だんでぼく達の育てたヒマワリやコスモスの苗が元気に花を咲かせてたくさんの人が喜んでくれたらいいなという思いでがんばりました。ぼく達の植えた苗がちゃんと育っているか心配でしたが、NHKのスペシャル番組で尾形さんの笑顔や元気に咲いているヒマワリを見てほっとしました。

今日は来年の春に咲くチューリップや水仙の球根とパンジーの花を植えるのを楽しみにして来ました。また、たくさんの人が立ち止まって、花を見て笑顔になってもらえたらうれしいです。

それから栃木のお米を食べて元気になってください。ぼくはこれからも石巻のみなさんの笑顔のためにボランティアを続けていきたいです。

平成 25 年 11 月 24 日 下野新聞

下 野 新 聞

1023 那須塩原 0287 (67) 1623 矢板支局 0287 (40) 1023
1024 支局 FAX (67) 1624 FAX (40) 1024

仮設住宅の被災者に新米や応援メッセージを贈る子どもら



児童生徒が被災地に

那須烏山新米と球根携え訪問

心つながり
東日本大震災

【那須烏山】市内の児童生徒ら約40人が「小中高生親善大使」としてこのほど、東日本大震災で被災した宮城県石巻市を訪れ、那須烏山産などの新米約360キロと子どもたち

A那須南と災害ボランティアチーム龍JIN

の応援メッセージを9カ所の被災者らに手渡した。また、6月に児童生徒が花を植えた門脇地区も訪れ、新たに那須烏山市民15人から提供されたチューリップやスイセンの球根を植えた。

が昨年から実施。親善大使は荒川小、烏山、下江川中、烏山高、ガールスカウト、烏山クラブのメンバーらが加した。牡鹿半島の鮎川小仮設住宅集会場では、子どもたちが歌を歌い作文を朗読し、被災者との交流を深めた。その後、仮設暮らしの55戸に新米とメッセージを届けた。古内勝治区長(69)は「子どもたちから励ましてもらいありがたい。5年後には仮設を卒業できると思う」と感謝の言葉を述べた。烏山高2年の薄井佑季さん(17)は「被災地の現実を見て勉強になった。市民から提供された球根が花を咲かせ被災者が笑顔になれば」と話していた。(近藤文則)

平成 25 年 12 月 10 日読売新聞

「時評」は約3か月毎の定期執筆を依頼されているものです

時評

伊豆大島が未曾有の台風被害を受け、多くの犠牲者を出した。被害を受けた方々から哀悼の意を表したい。多くの人は東日本大震災の記憶を重ね合わせて、いろいろな思いを持ったのではないかな。

どんなに小さなことでも、被災した方々のためにできることがあれば喜んでやりたいという人はたくさんいると思う。ボランティアチーム「龍」は、震災で大きな被害を受けた宮城県石巻市門脇地区に子供たちと花壇をつくり、

ボランティア団体「龍」代表 小堀 道和



来春に向けた計画も進めている。市の広報誌にチュリッブ、スイセン、パンジーなどの球根・花の提供を呼び掛けた時は、15人以上の方が協力を申し出てくれた。受け取りに行った時、提供者の方々が被災者のために協力できる喜びを言葉にしてくれたのが印象的だった。JAなす南からの新米提供や子供たちの応援メッセージもうれしかった。

多くの人は東北の復興は順調に進んでいると考えている。市報誌にチュリッブ、スイセン、パンジーなどの球根・花の提供を呼び掛けた時は、15人以上の方が協力を申し出てくれた。受け取りに行った時、提供者の方々が被災者のために協力できる喜びを言葉にしてくれたのが印象的だった。JAなす南からの新米提供や子供たちの応援メッセージもうれしかった。

被災された方々は今も自分たちのことを気にかけて応援してくれる人がいるだけで元気になれると話し、私たちの働きかけには心からのありがたさな言葉が返ってくる。小さなことではあるが、多くの人が同様の支援をすればとても大きな力になるのではないかなと思う。特に子供たちが加わると、力は何倍にも増すと実感する。

ただ、多くの人は支援しようと思っても、どうすれば良いのか分からないうちに機を逸してしまうようだ。こちらから働きかけると、多くの方に、心寄り添う支援の大切さを実感する。相手からありがたさのメッセージを受け取った時は、行動したことの喜びや笑顔が倍以上になっている。働きかけた私たちもうれしい気持ちになり、活動に弾みがつく。

小さな支援 大きな力に

こんな時から働きかけると、多くの方に、心寄り添う支援の大切さを実感する。相手からありがたさのメッセージを受け取った時は、行動したことの喜びや笑顔が倍以上になっている。働きかけた私たちもうれしい気持ちになり、活動に弾みがつく。

今回の活動の感想文を紹介します。

渡辺さんは6月の花壇作りにも参加しました。夏休みには家族を石巻に案内しています。今回は3回目の参加です。

「ボランティア活動に参加して」

荒川小学校6年 渡辺海人

ぼくが東北へボランティアに行く動機は東北の方々になにかできないかと、いつも考えていて、その思いで参加しました。

まずカキの加工場は昨年より便利そうになっていました。

仮設住宅では昼食のおすしをいただき、その後みんなで歌をうたいました。みんなとても元気で心に傷をおっているとは思えませんでした。まだ心の中では、いろいろな傷をかかえているそうです。

最後は、尾形さんの所へいきました。尾形さんが「この土地は津波に備えて高くするんだけど、お花を見て一人でも戻ってきてほしいんだ」とおっしゃっていました。ぼく達の植えた花を見て一人でも戻ってきてほしいと思いました。

帰りのバスで小堀さんが「物理的な復興は進んだけど、心の復興はなかなか進まないんだ」との言葉で、心の復興を進めるため、またボランティアに参加しようと思いました。

中学生も紹介します。佐藤さんは初めての参加です。

「ボランティア活動を振り返って」

下江川中学校2年 佐藤来海

私の今日のボランティア活動は一言で言い表すと、とてもすばらしいものだったと胸を張って言うことのできる一日でした。最初はカキの加工場に行ってお米の贈呈をしました。現地の方々もとてもよくしてくださって、私達が逆に元気をもらってしまいました。次に行ったのは仮設住宅でした。今の宮城の現状をあらためて実感しました。お寿司をごちそうになった上に、いろいろな事でお世話になり、感謝でいっぱいになりました。

最後に訪れたのは尾形さんがいるボランティアの人達と作った花壇の場所です。最後のイベントということもあり皆、一丸となり素晴らしい仕上がりになりました。

このボランティアを通して、今私達が出来ることは何かを知ることができたし、貴重で素晴らしい体験だったと思っています。

絆の花壇を復興公園に残したい

伝える 東日本大震災

津波でほとんどの家が流され、更地が広がる宮城県石巻市門脇町。その一角に、地元住民とボランティアが協力して作り上げた花壇がある。

活動を引っ張るのは、地区でラーメン店を営んでいた尾形勝寿さん(68)。津波で妻のきみ子さん(当時59)を亡くしたが、「大好きな門脇を離れたくな

宮城・石巻支局長

平間 真太郎

い」と、自宅兼店舗の跡にキッチンカーを置き、名物の「石巻焼きそば」を売っている。

「将来への希望を込めて花を植えたい」。昨年11月、そう提案してきた地元の中学生に、駐車場の跡を提供した。今春、花壇では赤や黄色、ピンクのチューリップが花を付け、殺風景な更地に彩りを与えた。

「心が和んだ。花を植えて住民が再び足を運びなくなる土地にしよう」。尾形さんは、近所に借りて660平方メートルの土地を確保。ボランティア団体や関東地方の学生と土を耕し、苗を植えた。来年は、数千株のラベンダーやヒマワリなどを楽しめる予定だ。

しかし、この花壇はいつまで続けられるかわからない。津波から街を守るため、市が2・5

は盛り土をした道路を造る予定だからだ。

花壇作りを手伝った栃木県のボランティア団体代表の小堀道と和さん(64)は「住民と支援者の絆の証し。後世に残してほしい」と訴える。市は花壇の扱いについて住民と話し合いたいとしているが、計画を変更する考えはない。

近くには、県と市が復興記念公園を整備する。この公園に移すなど、行政と住民は花壇を残すために知恵を絞ってほしい。

被災地から 残したい「絆」の花壇

平成25年12月23日 朝日新聞 全国版

花壇に込めた絆の心を保存する運動を応援しよう！

門脇地区は山側を高台にして住宅地、海側は復興記念公園にする計画です。来年から工事予定ですがいつ始めるか分からない状態です。工事開始に伴い絆の花壇がなくなります。尾形さんは新しい公園の中に多くのボランティアの人達によって作られた花壇を絆の証として残して欲しいと訴えています。今の所、役所の返事はノーだそうです。尾形さんは全国の皆さんの声が強い見方になるので応援して欲しいとのことでした。

龍 JIN も色々な形で応援したいと思います。朝日新聞が応援記事を書いています。私もコメントしました。

JANA南より復興支援金贈呈

11月実施のJANAまつりでのバザー収益金及び募金の合計¥135,679全額を寄付していただきました。龍 JIN に寄贈したのは「目に見える形で被災地のために遣ってもらえるから」とのことでした。被災地の皆様の笑顔のために活用させていただきます。

業界専門紙である日本農業新聞(日刊紙約40万部発刊)に紹介されました。

復興支援の募金を贈呈

栃木・JANA南

【栃木・JANA南】JANA南はこのほど、那須烏山市社会福祉協議会を通じて、同市災害ボランティア団体の「チーム龍JIN」に13万5679円を送った。11月に開いたJANAまつりで、大震災被災地の復興支援を目的としたバザーと募金を行った。

JANAの山田清組合長は

「11月に被災地に行ったが復興には程遠い。今後龍 JIN と協力し、被災地を支援したい」と話した。JANAでは同チームの支援活動にも協力。新米を被災者らに贈呈した。

同チームの小堀道代表は「大震災が風化している中、ボランティアの参加希望者は後を絶たない。より多くの人を被災地に連れて行き、現地の方々と触れ合って、生きる力や喜びを感じてほしい」と力強く話した。

日本農業新聞(8万部日刊紙)
平成25年12月13日



募金を手渡す山田組合長

最後に

今回は紙面の関係で掲載困難な応援団の新聞記事といつも感動を与えてくれる子どもたちの作文・感想文を中心に紹介しました。ほんの一部のみの紹介になりましたが子どもたちの心は皆様の胸に届いたと思います。さらなる充実した活動を続けていきますので応援、よろしくお願いいたします。